

北海道観光の底上げのために ～ 観光地ではない小町村の観光振興 ～

How to Stimulate Tourism Industry of Small Towns in Hokkaido

目黒聖直*1

MEGURO, Masanao

(要約)

北海道の観光を全体として活性化するためには、観光都市でも有名温泉地でもないという多くの小町村が、そのための取組を進めることが肝要である。その際には、よく言われるようなソフト対策よりも、地元の関係業者が協力・連携して、まずは、街中のホテルそのほかの観光に必要となる施設、すなわちハードの整備を進めることこそが大切である。

キーワード：小町村の観光、ハードの大切さ、協力・連携

1 本稿で議論すること

私は北海道で生まれ育ったが、社会人になってからは、札幌、東京、ストックホルム、福岡の各都市で勤務してきた。各都市在住時には、休暇を利用してそこから行き来できる場所を旅行している。以下では、各地域への旅行を通じて感じたことを基に、これからの北海道観光をより盛んにしていくためにはどうすべきかについて、考えてみたい。

感じたことを基にしているだけに、データの分析や文献の引用等を含むわけでもなく、論文というよりはエッセーのような印象を与えてしまうかもしれないが、その点はご容赦いただきたい。また、長い文というのは一般にはビジュアルなものがあつた方が読みやすいのだろうが、旅行先の写真を掲載することで単なる紀行文になってしまっても困るので、本稿は文章のみにしている。

2 観光を盛んにすべき地域とそこを観光する人

北海道の観光をより盛んにしていくために、本稿では、道内の大部分を占める観光地とは言い難い普通の小町村の観光活性化ということを考えたい。

なぜならば、観光地北海道と言いながら、観光客が多く訪れる場所は、札幌・小樽・函館、あるいは富良野・ニセコといった観光都市やいくつかの有名温泉地に限られて、大多数の小町村においては、観光に関して相当に寂しい状況にあり、北海道の観光を全体として活性化するためには、観光都市でも有名温泉地でもない多くの小町村で取組を進めることが肝要であるからである。

この場合、道外、海外から観光客を招くというよりは、まずは、道内他市町村から足を運んでもらうことを目指すところから始めるのが現実的であろう。都市から離れた道の駅などで大勢の東アジアからの観光客を見ることもあるが、それでも、小町村がいきなり、多数の東アジアの人たちの来訪を恒常的に確保するのは簡単ではないはずだ。

*1 北海道開発局勤務

しかも、世の中では、爆買いという言葉が流行語になり、どうやってその売上げをさらに伸ばすかに誰もが血眼になっているが、外国人に観光してもらうことばかり考えて、地元（北海道）の人たち自身がもっと観光を楽しむための議論が忘れられているのが現状だ。

3 まちづくりと観光

本稿では、道内小町村にあって、観光に関係するビジネスに携わる人たち、特に、飲食・宿泊の業に携わる人たちや、地元の観光産業を活性化させる任にある役場の観光（を担当する）課や観光協会の職員の人たちに問いかけるという気持ちで記述を進める。

役場の観光課、と書いたが、私は、観光ビジネスの範囲を超え、普遍的な地域活性化策として、全役場を挙げて地域の再生のために観光を盛んにしようとする考え方には反対である。「観光まちづくり」という言葉があるが、観光を盛んにして町村が甦るなどと考えるのは、多くの場合、夢物語に近いと感じる。

私も訪れたことがあるが、我が国の代表的な観光都市のひとつである長野県小布施町には、同町ホームページによると、年間 110 万人以上の観光客があるそうである。おおよそで、町の人口の百倍である。日曜日の昼下がりには人が誰も歩いていない道内の人口数千人の小さな町村に、年間数十万人の観光客を呼ぶことはどれほど大変だろうか。しかも、小布施は、観光客となりうる数千万の人々が居住する東京圏から日帰りで行けない距離ではないが、札幌からすら遠距離にある道内小町村にとっては、日帰り圏内の人口は多くても数十万人程度にとどまるだろう。

百倍の観光客を呼ぶ努力をするくらいなら、ほかのことに努力をした方がいい。

ただ、その町村の経済の屋台骨を変えるには至らなくても、町村内の観光に従事する人たちにとっては、今より少しでも観光客を増やす努力は当然に必要な。本稿では、そのために何をしたらいいかということを考えてみたいということである。

4 ハードの大切さ

今日、各地で、新しいイベントを始めたり、B級グルメを開発したりと、ソフト的な部分での観光活性化のための取組があちこちで行われている。B級グルメにしても、食材の組合せや味付けといったノウハウの問題、すなわち、企画とか考案とか目に見えない部分を本質とするものだという事である。あるいは、昔から「北海道は、自然は一流だが、サービスは五流」などと言われてきたが、そのサービスのあり方などもソフトの一例である。

世の中の潮流に反することになるだろうが、本稿の主張は、そういうソフトよりも、ハードを見直せ、ということである。

これまでの旅行で、私にとって最も印象に残っていることのひとつに、チップング・カムデンで泊まったB&Bがある。チップング・カムデンは、美しい田園風景で知られる英国コッツウォルズ地方における観光拠点の町として知られている。

そのB&Bは、たしか、英国でよく見られるテラスハウス（西洋長屋）の一角だったと思うが、室内は西洋独特のクラシックで優雅な雰囲気満ちていた。

しかし、何が驚いたとって、その清掃の徹底振りである。どう徹底的吗ということ具体的に指摘できるわけではない。しかし、とにかく綺麗なことが部屋中から伝わってくるのである。

チリー一つないというのはこういうことかと思わされた。きっと、宿の女将（と呼ぶのがぴったりするような女性だった。）の趣味は清掃なのだろう。

女将は、チェックインのときに前金の支払いが済むと、その後は一度も姿を現さなかった。

結局、朝食時には誰もいない食堂で勝手に食べて、チェックアウト時も誰もいないカウンターに鍵を置いて去った。ちなみに、夕食のときは、地元の店からテイクアウトして部屋で食べたが、私の妻はウサギのミートパイの味を絶賛していた。

つまり、滞在中、宿の人との触合いが全くなく、その意味では対人サービスは全く受けていないのだが、満足度は極めて高かった。建物の清掃、広い意味でのメンテナンスがしっかりしていたからであって、ハードの維持が適切に、いや、最高レベルで行われていたからだということになる。清掃は行為であってハードではないと考える向きもあろうが、私には、清掃の結果としての文字通り磨かれている状態になっている施設（ハード）自体が印象に残ったわけである。

旅の思い出には、すばらしい景色とか地元の名物料理とかいろいろあると思うが、宿の部屋が狭かったり、壊れていたり、汚かったりして、一晚を不快に過ごした地には、たとえ宿を変えてでももう一度行きたいという気持ちにはあまりならない。宿のハード部分、つまりどんな建物か、というのは、それが適切に管理されているかも含めて、決定的に大切だと思う。

もちろん、観光する場合、日帰りのために宿は不要なこともある。しかし、北海道の場合、札幌から4時間では行けないような、つまりは日帰りが難しい市町村が多数あるのだ。

いや、札幌から比較的近い距離にある市町村でも、宿泊客を増やすことは重要である。

飲食店の売上げを増やすためには、観光客に酒を飲んでもらうことだ。しかし、自動車を使って日帰りで訪れている人は、酒を飲むことができない。観光客を泊まらせて、酒を飲ませることが、地元の観光ビジネスにとっては大切なのである。

我が国の温泉旅館の場合、宿泊棟、食事処、土産コーナーが、大浴場とともにひとつの建物に収まっている。それに対して、街中に滞在する場合は、宿泊、飲食、土産等の買物、ということ、別々の施設にて行う。しからば、宿泊のための施設が見劣りするものであれば、それによって観光客が寄って来ないなら、飲食や、土産等の買物のための施設も、その巻き添えを食って、観光客に対する売上げは見込めない、ということになってしまう。

5 ホテルの可能性

ここで、小町村ではないが、ひとつの例を取り上げる。

帯広の市街地ややはずれにある北海道ホテルは、温泉施設も備えているために「森のスパリゾート」を謳ってはいるが、おそらく同市内では最もグレードの高いシティホテルではないかと思う。レンガのアーチが幾重にも連なる結婚式用の教会などパブリックスペースも豪華であるが、宿泊者のための部屋も壁面に木材を多用し、それ以外の部分も壁紙でなく漆喰であるなど、少し大きさに言えば、後述するパラドールの室内にも負けないほどの良い雰囲気である。また、広い芝の敷地もあって、夏であればそこで散策をしたりして、一日中をホテル内で過ごせそう。

そもそも、東京の御三家や新御三家と言われる高級ホテルの場合は、館内に高級ショップや飲食店が多数並び、ひとつの街のようになっていて、中には和風庭園など広大な敷地を有しているものもあるので、その気になればホテルの中だけで数日でも過ごせそうである。

東京のホテルはさておき、現状、帯広市は必ずしも人気観光都市として認識されているとは思えないのだが、北海道ホテルのような滞在するだけでも価値があるホテルがあって、大勢の人たちが宿泊に来れば、その人たちが北の屋台で飲んだり、六花亭や柳月で買物をしたりするだろう。規模は小さくとも、同じことを小町村でも実現したいものだ。

6 観光客向けのホテル

最近では誰もが知っていると思うが、スペインには、各地にパラドールという宿泊施設がある。以前は国営であったと聞かすが、多くは、古城や昔の修道院等の外観はそのままに、内装を新しくしたという建物で、内部は豪華で趣のある空間になっている。しかし、もともと国営というだけに、値段は驚くほど高額というわけではない。

このパラドール、市街地の中に位置する場合も多く見られる。切り立った崖で切り取られた地形の上のできた小さな街の突端に位置して、崖の下に広がる平原を眺め渡すことができるといふ景色のよさが売り物、という例もある。

もちろん、端から端まで簡単に歩いて行けるほどの小さな街にも立派なパラドールがあるのは、スペインが観光国だからということでもあろう。しかし、対照的に、観光の面ではあまり振るわないスウェーデンでも、いくつかの小さな街のホテルに泊まったことがあるが、どこも、室内は豪華でなくても小奇麗に整えられていた。30年も35年も前に新築されて以来、全く手をつけられず、壊れたり傷んだりした部分もそのまま放置されているといった我が国の安ホテルで時折見られるようなことは、皆無である。そもそも、欧州では、築何十年、場合によっては、何百年という建物の内部を逐次更新しながら使ってきているので、ホテルにしても、定期的な室内のリノベーションがなされていないということはあるのであろう。

日本国内の場合、私自身が泊まった宿で、ブラウン管式のテレビが置いてあったり、ダイヤル式の黒電話が備え付けられたりしたのに出会ったことがある。いずれもそれほど前のことではない。どちらの宿にしても、その方向性を徹底すれば、レトロ感溢れる室内ができあがるかもしれないが、そんなことを考えて古い設備を放置していたわけでは、当然なかったようだ。

五つ星クラスのホテルが欲しいというわけではない、小町村であっても、小さくていいから観光客が普通に泊まれるホテルがあって欲しいと思う。トイレが各室にはなくて共同である、とか、前述のようにろくにリノベーションも行われていない、とか、およそ観光客が宿泊を躊躇するようなことだけは避けてくれ、ということである。

なお、ハードの整備と言いながら、ここまでホテルのことばかり述べてしまったが、市街地中の庭園や広場の整備ということもまた重要になろう。特に、今後、人口減少や空き家の増加等が進んで市街地の中に空き地が増えてこようから、そこを放置したままではなく、綺麗に整備しておくことが観光客の心を捉える上でも大切であるに違いない。それをホテルの敷地整備の一環として行うのか、公共空間の一部として整備するのかといったことは、ここでは措いておくが。

7 移動のためのハード

泊まるためのハードが宿であるなら、移動のためのハードは道路である。

福岡での勤務時代、有名な黒川温泉を通過したことがある（宿泊はしていない。）。

おそらく、宿は素晴らしいのだろうけれども、そこに行くまでの国道は、走っていてあまり快適なものではなかった。沿岸部を除くと山がちな九州では仕方ないのだが、高速道路ではない一般の道路は、アップダウンやカーブが多い。だからこそ、上り詰めたところでいきなり視界が広がって、素晴らしい光景が目の前に飛び込んでくるという場合もあるのだけれども、一般的には、平坦でまっすぐな道路の方が走りやすく、運転が楽しい。

北海道には、まっすぐな道が多いと思われがちだが、数多い峠が地域と地域間の移動の妨げになる。札幌からニセコ方面に行く場合を考えてみるとよい。国道 230 号中山峠も 393 号の毛無峠も運転するには結構大変だ。これでは、レンタカーで走る道外の観光客もがっかりだろうし、もちろん、道民にとっても不便なことだ。

高速道路を始めとして、道内の道路のさらなる整備は観光のために重要である。

8 鉄道

観光のための移動と言えば、鉄道も忘れてはならない。

ストックホルムに住んでいた頃に、旅行中に乗ったフランスの TGV やスペインの AVE といった高速鉄道車両の室内の雰囲気や車窓の様子は印象深いものだった。欧州の場合、ターミナル駅の建物も素晴らしく（重厚な歴史ある建物が多い。）、出発するまでの高揚感もさらに増幅される。

九州においては、水戸岡鋭治氏デザインの列車群が見られる。「ゆふいんの森」（座席数を取りすぎて、室内が若干窮屈な印象はあるが。）のようなリゾート列車ばかりでなく、「かもめ」、「ソニック」といった在来線特急や九州新幹線のような一般車両にしても、どれもデザイン性に優れていて、乗ってみたいと思わせるし、乗れば楽しい。

いずれも水戸岡氏のデザインによるというところがまた素晴らしいところで、同一の人物の手によるものであればこそ、「これは JR 九州の車両だ」とわかるのである。もっとも、このことは、車両に限ったものではなく、たとえば、バルセロナに行けばガウディの建物があちこちあって、それがバルセロナらしさを醸し出す。北海道でも、釧路市には釧路キャッスルホテルや釧路フィッシャーマンズワープ M00 など地元出身の毛綱毅曠（もづなきこう）氏による建物がいくつもあり、それらのユニークなデザインが釧路の景観に特徴を与えている。

ともあれ、九州に比べると、北海道では、JR に元気がなくて寂しいことだ。

もちろん、北海道の鉄道営業は、九州に比べてさえ、さらに相当に厳しい条件の中で行われているわけで、JR 北海道ばかりに責任を負わせるのは酷というものだ。しかし、今後の北海道では、線路というハードの改良はなかなか難しいかもしれないが、車両というハードは工夫次第でいいものにできる可能性はあるはずだ。

今から 30 年前につくられて全国的なリゾート列車ブームの先駆けとなった「アルファ・コンチネンタル・エクスプレス」は、当時の国鉄北海道とホテルのタイアップによって実現したものである。JR 単体ではできないことでも、他との協力・連携で可能となることは今でもあるのではないだろうか。どこかで市町村と JR が連携して観光列車を走らせるなど、沿線自治体全体で鉄道を盛り上げていくことを期待したい。秘境駅を地域の資源と捉えようとする動きもあると聞く。

博多まで新幹線が通じて、40 年も経ってから、ようやく北海道の片隅に新幹線がやってくるというくらいで、オール北海道で喜んでいる場合ではないのである。

9 ソフトについて

ソフトは不要だということではない。

ディズニーランドに多くの人々が集まるのに、同様の施設がある他の遊園地はあまり成功しない。ディズニーランドには客を楽しませる独自のノウハウというソフトがあるからだ。ハードが同じであれば、そのあとの成功はソフトの優劣による。だが、それとて、ハードが整っていることが前提として求められる。

極上のサービスが観光する客に最も深い印象を与えることも否定しない。5年前の客の名前を覚えていたドアボーイとか、無理難題と思われるようなリクエストを軽々とクリアしてしまったコンシェルジェとか、そんな究極のサービスというようなものの場合だ。そんなものが求められる世界も確かにあろう。しかし、多くの場合は、他より少し優れたサービスよりも、まずはハードの部分で十分なレベルに達することの方が先決ではないだろうか。

「おもてなし」という観念にも気をつけたい。一時は流行語にもなった感のあるこの言葉は、訪問者への思いやりを示す日本人特有の美德として意識されることが多いのではないかと思うが、だからといって、とにかく観光客に何かおもてなしをしなければならないと強迫観念に囚われる必要はない。観光客の中には、自分（たち）だけでゆっくり過ごしたい、放っておいて欲しい、という人もいるはずだ。滞在できる環境さえ提供してくれれば、宿の人の余計な案内や挨拶は省いてくれという場合だ。なにかをしてあげるだけが能ではない。

不十分なサービスの提供に不快に思うことすらある。そんなものは、ないほうがよい。

10 観光振興の第一歩

ここまでの考察をもとに、現状、あまり観光客が訪れない道内の小さな町村において、観光客を少しでも増やす簡単な方法を考えてみたい。

特別な名所や集客施設を有してはいない普通の小町村であっても、その町村の街や自然のありのままを見てもらうことで人々を惹きつけることは可能なはずだ。富良野や美瑛でなくとも、どこの町村にでも、北海道らしい綺麗な景色はあるものだ。

加えて、人々の営みから生まれたものの中にその地域ならではのものがあって、その地域色が濃ければ濃いほど、それは強いアピール力を持つ。特に、食べ物がそうである。

私は、福岡に住んでいたときに旅行した広島県三次市、宮崎県延岡市、鹿児島県出水市などで、市街地内のホテルに泊まり、その中心部を歩き回って、地元の人たちで賑わっている居酒屋に入店し、聞いたこともない名前の食べ物が載ったメニューを見ながら、地域の産物を味わった。地元の雰囲気を感じられて、その土地に来たということを実感したものである。

札幌にある博多料理の居酒屋に入っても、博多で食するのとは印象が違う。要因として、特に、福岡や長崎で獲れる魚の弾力のある刺身は、札幌ではなかなか味わえないというのが大きい。再び福岡を訪問することがあれば、そのときは多分、刺身を食べたときに福岡にいることを実感するだろう。逆に、少し昔のことだが、福島県の温泉旅館で、なんと石狩鍋（としか思えなかった。）に出くわしたことがある。それで福島に来たと実感できるだろうか。

そもそも、温泉旅館での夕食では、決められたものを食べさせられる。おもてなしのつもりか、

食べきれないほどの量が出てくる。多少はそれも影響して、料理の料金は、居酒屋で単品料理をいくつか頼むよりよほど高い。

温泉に入って、浴衣に着替えたら、旅館の中で普段にはない豪華な食事をして、あとは寝るだけ、という気楽な時間を過ごすためには温泉旅館だからこそ快適という場合もあるが、時には、宿泊施設の外に出かけて、自分で選んだ地元のものを食べるというのも嬉しい。（温泉街ではなく）地元の市街地を歩き回るのも楽しいものである。

しかし、多くの場合、北海道の小町村市街地においては、長期出張の人たちが泊まるような実利一点張りの低料金のかかなり老朽化した宿があるのみだ。そういう街でも、時に町内の飲食店マップを見かけることがあり、その制作までの努力は買うが、観光客に飲食店で酒を飲んでもらったとして、その客がどこに泊まると想定しているのか、理解に苦しむことが多い。

今すぐ小布施のような美しい街並みをつくり上げることは不可能でも、一軒か二軒の小さいけれども観光客が満足して宿泊できるホテルをつくり、夕食時には街へ繰り出してもらって、地元の飲食店に入ってもらい、ということを実現するのならそんなに難しくはないのではないかと。

チェックアウトをしたあとは、地元の農産物や菓子を土産に買ってもらう、そのために地元の店を覗いてもらおう。特に、菓子は、小さな町だからといって侮ってはいけぬ。思いっただけでも、賞味期間一時間というせたな町の岩シュー、月形まんじゅう、浜頓別町の砂金パイや牛乳最中といった菓子は、有名だし、実際、有名になってしかるべきという味だ。おそらく、ほかの小さな町村にも、それらに負けない銘菓がたくさんあるはずだ。

こういう小さな町村を訪れて飲食する小さな旅、北海道の人が他の小町村にふらっと出かけていく旅は、派手なアトラクションを求める向きには受けないかもしれないが、特に中高年齢層の人たちの中には関心を示す人も多いのではないかと。それは、自分の住んでいる市町村以外のどこかを訪れることを通じて、ふるさと北海道を見直す旅にもなる。こうしたことを通じて交流人口の拡大を進めていきたいところである。

11 ハード整備のための連携

観光に係る範囲で多少のハードの整備をしたからといって、すぐに観光都市ができあがるわけではない。それでも、宿泊客が増えれば、多少なりともその小町村の観光が活性化されて、町内の店舗や飲食店の売上げに少しはプラスになる可能性くらいは十分にあると思う。

現実には、なぜ、そうならないのか。

街に宿泊客が増えることで儲けが期待できるのは飲食店や菓子店等の商店である。しかし、金をかけてホテルを改装する方は、改装費に見合うだけ客が増えるのかは不明であり、改装は冒険である。飲食店や菓子店は、ホテル側の冒険にただ乗りするだけである。これでは、ホテルとしては、新たな投資をしようとはなかなかならない。だから、宿泊客の飲食代金の一部が、宿泊先のホテルに還流するような仕組みを考えるなどできないものかとも思う。

そもそも、地元でのホテルと飲食店の連携は十分なのかと首をひねることはある。西日本のある十万都市にて宿泊したホテルで、夕食のための店の紹介をお願いしたら、「本日は日曜日なので地元の店は定休日かもしれない」と言うフロント係に紹介されたのは、全国チェーンのありふれた居酒屋だった。実際に市街地を歩いてみると、営業している地元の店はあるのに、だ。

地元の観光関係業者の連携を進めることが求められている。ホテル以外の店舗同士であっても、共通割引券の発行のようなソフト的対策も可能ならば実施すればいいが、そういった連携の末には、街中のストリートファニチャーなどハード面の整備を進められれば理想的である。

つまり、地元の関係業者が協力・連携して、観光のためのハードを整備すること、これが本稿の結論である。

私には、スウェーデンで暮らしていた頃に、その国内や他の欧州各国で見た美しい街並みの印象があまりにも強い。我が国でも、重要伝統的建造物群保存地区に指定された倉敷の美観地区や萩とか、九州で言えば筑後吉井や日田市豆田町といった街の様子は負けず劣らず美しい。それが、建物や街路といったハードの充実こそ、なによりも大切だという思いにつながっている。

もちろん、こう言うと、そんな整備のためのカネはないという反応がすぐに返ってくる。そして、整備のためにもらえる補助金があるのならば教えて欲しい、という話になる。

しかし、すぐに誰かに頼るのではなく、いろいろと工夫してみようということにならなくてはいけない。あるテーマパークに附属した洋館風ホテルに泊まったことがあるが、一見豪華なソファのカバーをめくったら、その側壁は厚紙でできていた。大きな企業だって無限に金があるわけではないから、そういった知恵でハード整備の費用を削減しているという例である。

今は観光の面では寂しい実態にある小町村も、知恵を出し、行動しなければならない。

(2015年12月04日受理)